

どと短絡したのである。とりあえずは進級したものの、学ぶことそのものが思うような自信につながらず、なにができるのか、何をしたいと思えているのか、要するにお前は何者なのか、という類の煩悶が私を襲っていたのである。文学青年だった田村吉司君とは、山に登ることについて、そんな風な会話をした覚えがあるのだ。そうした煩悶を抱えて私は西穂に登ることを希望した。登りきることは、「風立ちぬ いざ生きめやも」だった。ある意味の自己確認の場所が私にとっての西穂・独標だった。

落雷の瞬間は私には記憶がない。倒れた北側の最低鞍部上を流れる冷たい雨水に背中を洗われ、着ていたビニールのポンチョに当たる電の音のなかで目覚めた。横内先生や上條君、中村君に保護されながら、独標の北側のほんの少し上がった場所に坐ってぼんやりしていた。寒さに震えながら、随分長い時間そこにいた。何を感じ、なにを考えていたのかは思い出せない。死者が出る状況に直面したことと、ともあれ私はいま生きているのだということを時間の経過とともに実感したのだらうと思う。時間の経過は、雨が上がり西の空が真っ赤に染まったことが示している。——これも記憶の改変かもしれないとあまり自信がなかったが、先日の山上で、みな「夕焼け」を口にしたので、ようやくにして、確信がもてた。

こうしたことを思い出してみると、西穂・独標とは、私にとっては、11人の彼らが今もそこにいる場所なのである。それも、当時のままの彼らがそこにいるのである。だから、時には「何やってるんだ、お前」という罵声であったり、「しっかりしろよ」という励ましであったりする。

近年、一緒に登る仲間が増えた。33回忌のときに、10人ほどが集まってからは、毎年のように顔を合わせる仲間ができた。だから、近年は山に来る意味がもうひとつ増えた。「おい、あんたも一年元気に過ごしたんだな。うれしいな。また来年も会おうよ。」もちろん、これは11人の仲間たちにもかける言葉である。

